近世佐賀城における上水道経路の検証

－多布施川から佐賀城本丸に至る経路について－

井手　基子・山本　紗希

2025年9月

『西海考古』第15号　抜刷

近世佐賀城における上水道経路の検証

－多布施川から佐賀城本丸に至る経路について－

井手　基子・山本　紗希

はじめに

17世紀初頭の佐賀藩では、藩祖鍋島直茂・初代藩主鍋島勝茂の下、龍造寺氏の居城である村中城を拡張・整備して近世佐賀城および城下町の普請を行うとともに、上水道の整備がなされた。上水道の整備を手がけたのは、「治水の神様」と呼ばれる成富兵庫茂安（なりどみひょうごしげやす）である（註１）。茂安が活躍した17世紀初頭の佐賀平野の状況は、面積に対して河川が少ないために常に水が不足し、反対に大雨の際には、排水が効かずに水害が起こる状態であった。また、当時の水路網は、各地の土豪によってそれぞれに開発が行われていたために系統立っておらず、水事情を悪化させていた（註２）。そのような状況の中で、茂安は、水害防止と水不足解消のため、佐賀平野の中央部を流れる多布施川を改修して、佐賀城および城下町の上水道を設けた。以降、多布施川は、大正時代末期まで上水道として利用されており、その流路は、近世から現在までほとんど変わっていないと考えられる。しかし、佐賀城の本丸・二ノ丸周辺については、多布施川が直接流れ込んでおらず上水道の経路には不明な点が多い。

筆者は、平成30年度に行われた佐賀城本丸跡の発掘調査（事業主体は佐賀県立佐賀城本丸歴史館、委託業者は株式会社埋蔵文化財サポートシステム）に参加し、これまで知られていなかった水利遺構を確認したことをきっかけに、佐賀城の上水道について興味を持った。本稿では、多布施川から佐賀城に至る上水道の経路について踏査した結果を基に整理を行い、佐賀城本丸・二ノ丸周辺の上水道については、これまでの発掘調査の成果を踏まえて経路の検討を行いたい。

１　佐賀城上水道の研究小史

佐賀城および城下町の水利については、水利史研究または佐賀城普請に関する研究の中で触れられることが多い。水利史研究では、古くは天保５（1834）年に佐賀藩士の南部長恒（なんぶおさつね）により『疏導要書』が記され、佐賀藩内および周辺の主要な河川を調査し、その水利についてまとめている（註３）。多布施川の項では、成富兵庫茂安が多布施川の起点に築いた石井樋（いしいび）という取水施設について、「此専茂安ノ心魂ヲ労セラレン所ニテ不易ノ良法也」と称え、その構造を詳細に解説している。佐賀城の普請に関する研究においては、宮本雅明が佐賀城下町の形成とその構成について、文献や絵画資料を基に中世から近世、近代までの変遷をまとめている。そのなかで上水道である多布施川については、茂安により城と城下町の普請と並行して整備されており、「城下の城濠や周辺の飲料水、さらに流域の灌漑用水を確保するとともに、舟運にも利用し、城下町を支える動脈の一つとしたのである。以上の一連の工事によって、城下町佐賀は典型的な総郭型の体をなし、完成度の高い近世城下町として整備されるに至った」との評価をしている（註４）。

このように、茂安が行った水利事業や、近世佐賀城の普請に関する研究は数多くある。しかし、管見の限りでは、近世佐賀城内の水路や内堀に関する論文は見られるが、上水道を主題とした論文は、各発掘調査報告書内の記載以外には見られない（註５）。本稿では、近世佐賀城における上水道のその経路について、最新の発掘調査成果も踏まえて検証を行いたい。

写真１　石井樋から佐賀城へ至る多布施川全景（北から）

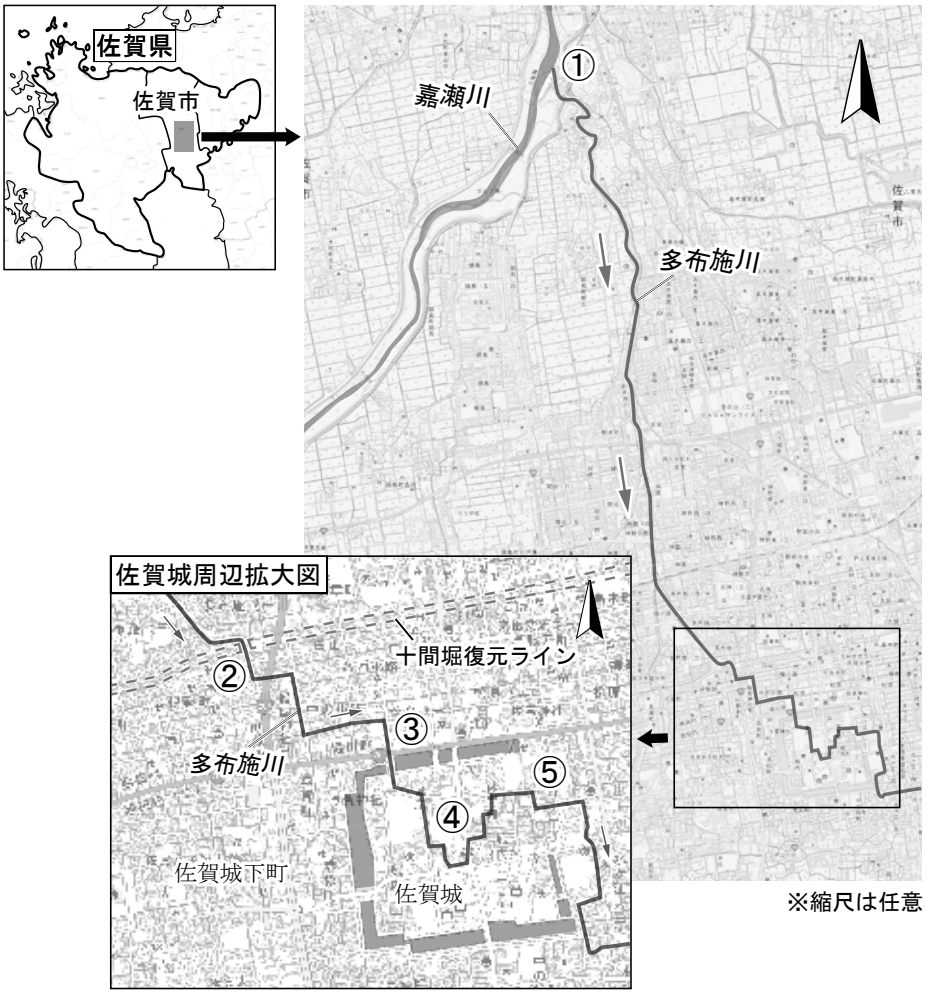


図１　石井樋から佐賀城までの上水道経路図
（地図は地理院地図より引用して加筆）

2　石井樋から佐賀城へと至る上水道の経路

佐賀城および城下町の上水道の起点は、嘉瀬川から多布施川が分岐する地点に設けられた石井樋である。ここでは、上水が石井樋から水路に取り込まれ、多布施川を通り、佐賀城に到着するまでの上水道の経路について、地点ごとに順を追って状況の整理を行いたい。

（1）石井樋

石井樋は、佐賀県大和町尼寺・東山田に所在し、多布施川の起点に位置する（図１の①）。元和年間（1615～1623年）に成富兵庫茂安によって築かれた取水施設である。多布施川の本流である嘉瀬川は、佐賀県内で２番目に大きな河川であり、本流の長さ41.7㌔を測る。脊振山系と天山山系に源を発し、佐賀平野の中央部を流れて有明海へ注いでいる。

石井樋とは、本来は樋門のみを指す言葉だが、現在では樋門のみでなく周辺に存在する諸施設を総称して石井樋と呼ばれることが多い。石井樋の各施設の構造は、次のとおりである（図２）。まず**荒籠**（兵庫荒籠・遷宮荒籠）という川岸から延びる石積に水流をぶつけて勢いを弱め、護岸をするとともに水中の砂を川底に沈める。次に嘉瀬川の中央に設けられた**大井手堰**で水を堰き止め、多布施川に引き込む（註６）。引き込まれた水流は、**象の鼻・天狗の鼻**と呼ばれる石積間の水路に入る。この水路内で水の流れは逆流することになり、更に勢いが弱められて水中に含まれる砂泥を川底に沈殿させる。このようにして浄化された水は、**野越**という堰で堰き止められて多布施川への取水口である**井樋**（石井樋）に送られる。井樋には３つの水門が設けられており、ここを抜けた清流が佐賀城方面へと流れ下った。また、野越を越えた水は、余水として嘉瀬川へ戻される仕組みであった（註７）。

石井樋は、1960年に上流の堰に付け替えられた後は、水害等により崩落して次第に埋没していく状況であったが、1994年に再整備が決まり、平成６～17年度にかけて発掘調査と復元整備が行われた。現在は再び石井樋の各施設が機能し、浄化した豊富な水流を多布施川に供給している。

（2）佐賀平野から佐賀城下町までの多布施川

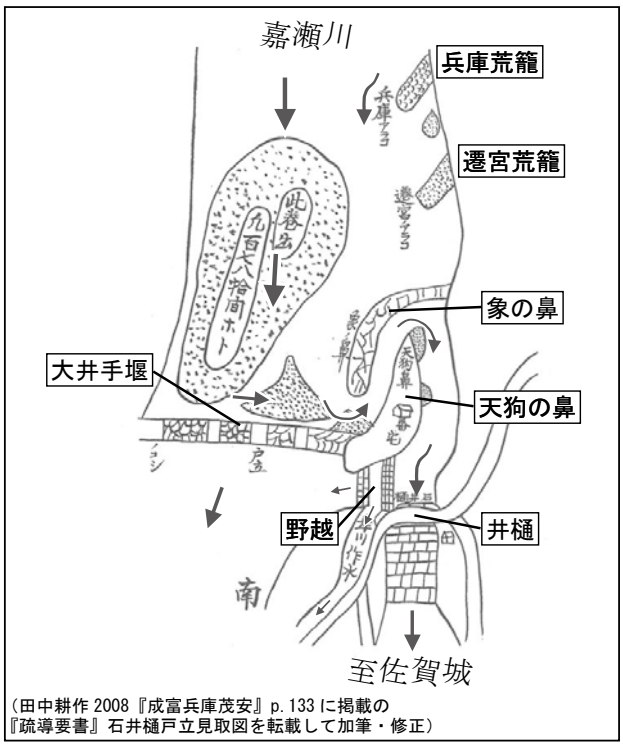
多布施川は、石井樋にて清流を引き込んだ後、佐賀城方面に向けて南へと流れ下る。多布施川の流路は、ほぼ直線的に走っており、流域に灌漑用水を配りながら、おおよそ6.2㌔の距離を北から南へと流れて、佐賀城下町の北西部へと至る。

多布施川は、近世に上水道として改修される以前より、上流の山地から多量の土砂が流入して川床が高い天井川となっていた。そのため、周囲からの排水が入りにくく、反対に周囲へ水を配りやすい特徴があり、この特徴が城下町への上水道と流域の灌漑用水路を兼ねる水路として利用された（註８）。多布施川の両岸には、自然堤防を改修した堤防が設けられており、堤防の上端と周囲の土地の高さは、場所により約1.0～1.7㍍の比高差がある。この堤防により多布施川の水位は、周辺の地盤より高い天井川になり、周囲からの排水が入りにくく、佐賀城に至るまで清流を保つ構造となっていた（註９）。

また、多布施川が上水道として利用された近世から近代までは、清流維持のためにその利用方法については、厳重な取締りが行われた（註10）。加えて、定期的に石井樋を堰き止めて多布施川を干し上げ、流域の住民等によって水路の浚渫作業が行われていた（註11）。現在では、近代までのように頻繁な浚渫作業は行われていないため、川床には徐々に砂が堆積して水草が繁茂している状態だが、現在でもホタルが生息するほどの清流が保たれている。

（3）十間堀と多布施川の関係

佐賀平野を南下した多布施川は、近世では、佐賀城下町の北側に築かれていた十間堀に到達する（図１の②）。十間堀は、佐賀城下町の北側を囲う形で東西方向に延びており、堀の南岸に沿って土塁



（田中耕作 2008『成富兵庫茂安』p. 133 に掲載の
『疏導要書』石井樋戸立見取図を転載して加筆・修正）

図 2　石井樋模式図

写真 2　多布施川の起点（東から）

写真 3　石井樋の井樋（南から）

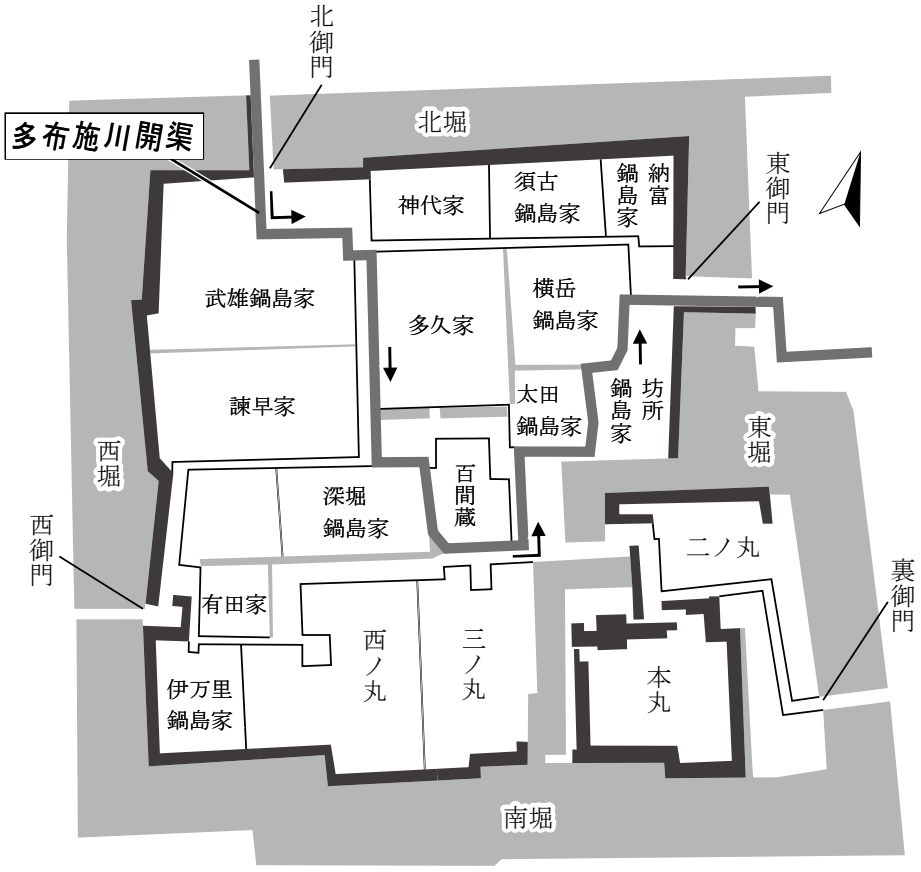


図 3　佐賀城内の多布施川経路と曲輪配置図（慶長期段階）
（図面は鍋島報效会2009『御城下絵図に見る佐賀のまち』に掲載の「御城分間絵図」p. 28-29、
「正保御城下絵図」p. 10-11（両図とも（公財）鍋島報效会所蔵）を参考に作成）

が設けられ、北側からの敵の侵攻を防ぐ役割を持っていた。

多布施川と十間堀が交差する地点は、現在では十間堀が埋め立てられており、近世の様相を窺うことは難しい。しかし、十間堀が機能していた当時を描いた複数の絵図をみると、多布施川と十間堀との交差地点では、十間堀を南北に渡る通路があり、通路上の西側に多布施川の開渠が通されて、十間堀の上を多布施川の開渠が通過する様子が描かれている（註12)。このことから、近世の多布施川は、十間堀と合流することなく、交差して城下町へ引き入れられる構造になっていたことが分かる。そのため、多布施川と十間堀が交差する地点では、後述する佐賀城北堀の構造と同様に、多布施川と十間堀の水位に高低差を付けて、多布施川の水面を高く、十間堀の水面を低くする工夫がされていたと推察される。これにより、水路は立体交差する状態となり、多布施川の清流に十間堀の水が混ざらずに、上水道として多布施川を城下町に引き込むことが出来たと考えられる。

（4）佐賀城北堀と多布施川の関係

十間堀を通過した多布施川は、近世では岸川町や伊勢谷町であった付近で大きくクランク状に幾度か折れて、佐賀城外堀である北堀付近に至る（図１の③)。近世には、この場所に土橋が架けられ、佐賀城の北側に北御門が設けられていた。多布施川の水路は、この土橋上に開渠として設けられており、北御門の脇を抜けて佐賀城内へと引き込まれている。

佐賀城北堀と多布施川が交差する地点は、十間堀と多布施川の交差地点と同じく、北堀の水面よりも高い位置に多布施川の水路を通して、北堀と多布施川を立体交差させていたと考えられる。この十間堀や佐賀城北堀で見られるような立体交差する水路構造は、初期の近世佐賀城を表した絵図にも描かれており、上水道が整備された当初から高度な土木技術が用いられていることが分かる（註12)。現在もこの地点では、道路上に多布施川の開渠が通っており、北から流れてきた多布施川が北堀と立体交差して城内に引き込まれる様子を見ることが出来る。多布施川の水位は、北堀の水面よりも約0.9㍍高く保たれており、多布施川の水路からは北堀へ水を供給しているが、北堀から多布施川へ水が流れ込むことはなく、多布施川の清流を保ったままで城内に引き込んでいる。立体交差地点の現況の水路は、花崗岩または安山岩質の石材が用いられており、石積方法は、布目積みまたは谷積みである。石材には、近代の豆矢の痕跡や現代のドリル痕が残っており、現在見ることが出来る水路は、近代から現代にかけて複数回の積直しが行われていると見られる。

（5）佐賀城内堀

上水道としての多布施川は、佐賀城北堀を越えると城内へ流れ込む。近世佐賀城は、龍造寺氏の居城である村中城を拡張・整備して完成された平城で、平面形は、南北800㍍×東西870㍍の概ね方形を呈する。城の外周は、全て最大幅90㍍の外堀で囲われており、北辺と西辺で１ヶ所ずつ、東辺で２ヶ所に橋が架けられて外部と接続していた。城の内部は、南東隅の一画を内堀で囲んで主郭部と外郭部を分けており、島状に独立した主郭部には本丸と二ノ丸、外郭部には三ノ丸・西ノ丸と重臣の屋敷が配置されていた（註13)。外郭部を流れる多布施川の本流は、上水道であると同時に城内を区画・防御する内堀の役割も持っていた（図１の④)。

北堀を超えた多布施川の開渠は、まず城内の北側にある重臣の屋敷地が配置される区域に入った（図３)。上水道である多布施川は、まず、近世佐賀城が築かれた当初は武雄鍋島家の屋敷であった曲輪の前に到達した（註12)。続いて、多布施川は、武雄鍋島家の屋敷地に沿ってＬ字に折れて、武雄鍋島家・諫早家と、多久家の屋敷の間を南北に通る通路に沿って、北から南へと流れていた。そして、多布施川の本流は、城内の中央にある百間蔵（武器庫）まで到達すると、その敷地に沿って折れ曲がり、本丸・二ノ丸へ続く土橋の前で北上した（註14)。北上した多布施川は、太田鍋島家の屋敷の南

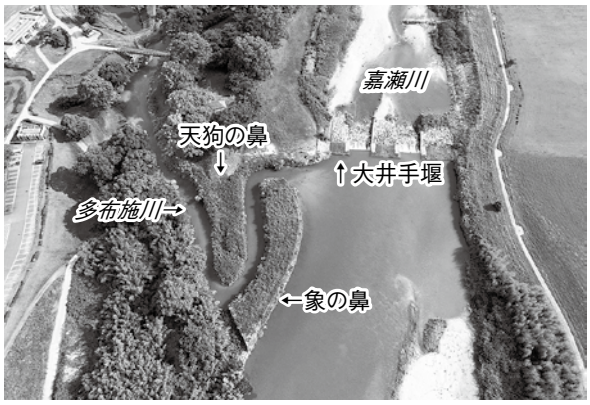


写真 4　大井手堰・象の鼻・天狗の鼻（下が北）

写真 5　象の鼻・天狗の鼻（西から）

写真 6　石井樋の井樋門（北から）
※手前が井樋門、奥が現代の水門

写真 7　多布施川流路（北から）

写真 8　多布施川の堤防と周囲の比高差（北から）

写真 9　かつての十間堀との立体交差地点（南から）

写真10　多布施川水路と佐賀城北堀の立体交差地点（北から）

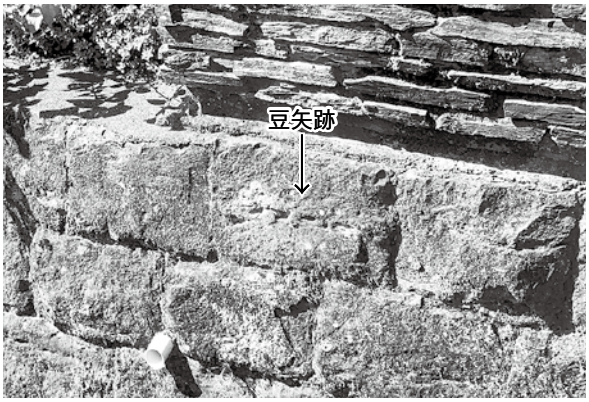


写真11　多布施川水路の護岸に用いられた豆矢跡が残る石材（東から）

側で東へ折れた後、太田鍋島家・横武鍋島家と坊所鍋島家の間の内堀として北へ流れる。その後、流路は、坊所鍋島家の屋敷地に沿って東側へ折れ、そのまま東進し、佐賀城の北東部に位置する東御門の前に架けられた土橋を通過して城外へ排出され、城下町へと流れ下った（図１の⑤）。

佐賀城の南東隅部に位置する本丸・二ノ丸には、多布施川の本流である内堀からどのようにして上水道が引き込まれたのかといった、詳しい経路は定かではない。近世佐賀城を描いた絵図は、17世紀初頭から幕末のものまで複数あるが、多布施川の水路（開渠）が本丸・二ノ丸に延びている描写は見られない（註12）。ただし、これらの絵図に表現されている水路は、開渠のみが描かれており、後述する発掘調査で確認された暗渠は表現されていない。そのため、多布施川の開渠として配されてきた上水道は、本丸・二ノ丸方面へ配水される地点で開渠が暗渠に切り替わっていたことが想定される。そして、その暗渠は、唯一外郭と本丸・二ノ丸の曲輪が陸続きとなる、三ノ丸前の土橋に設けられていた可能性が高く、上水は暗渠を通して三ノ丸前の土橋を渡り、本丸・二ノ丸へ引き込まれていたのではなかろうかと考えられる。

（６）佐賀城本丸・二ノ丸

三ノ丸前の土橋に設けられた暗渠を通って本丸・二ノ丸へ引き込んでいたと考えられる上水道が、本丸・二ノ丸内ではどのように配水されていたのかについて、佐賀城跡の本丸・二ノ丸内でのこれまでの発掘調査によって、数カ所から上水道と見られる暗渠遺構が確認されている（図４のＡ～Ｄ地点）。

Ａ地点：**水場遺構Ｓ44**（平成30年度調査、調査区１拡張部）は、佐賀城本丸跡の南東部、本丸御殿跡の奥「長局」建物の南側で確認された（註15）。平面形状は、約４×４㍍の正方形、深さ約２㍍を測る。石積方法は、天端石に赤石の竿石を用い、80㌢以下の赤石の切石を布積み（部分的に亀甲積み）して、石積背面には赤石破片で裏込めをしている。Ｓ44北辺には砂岩で８段の階段が設けられており、下へ降りることが出来る構造になっているが、後に切石を積み上げて塞がれている。

Ｓ44西壁では、天端石から数えて５石目に安山岩の竿石を渡して、その下に幅0.8㍍の暗渠が設けられている。Ｓ44東壁は、崩落しているため石積は確認できず、石積背面のぐり石が露出している状況だが、西壁の暗渠開口部と同等の高さに赤石の竿石を渡して暗渠が設けられている。このため、東壁も西壁と同様に、安山岩の竿石を渡して暗渠開口部が設けられていた可能性が高い。このＳ44の西壁・東壁に設けられた暗渠は、東西方向に延びている。以上のことから、Ｓ44は、水汲みを目的とした遺構で、暗渠網の途中に設けられた取水施設であると考えられる。また、Ｓ44の内部には、直径20㌢の丸木杭が立てられた状態で残っており、壁面では南壁の天端より５石目の隅と石段の４段目の西端に、角材を差し込む穴が設けられていた。加えて、内部からは板材や角材、丸木杭等の木材が多く出土しており、板材の中には厚さ約１㌢で斜めに釘が刺さっている屋根材と思われるものも含まれていた。これらのことから、Ｓ44の上には覆いのような建物があった可能性がある。

西壁暗渠の開口部における天井の標高値は2.79㍍、床面の標高値は、安全面から暗渠の床面まで掘削できなかったため、深さは不明である。しかし、Ｓ44の内部におけるトレンチ調査にて、Ｓ44石積の胴木の可能性がある丸木材を確認しており、その上面の標高値が2.07㍍であることから、暗渠床面の標高値も２㍍程度であることが想定される。

Ｂ地点：**赤石積暗渠跡Ｓ10**（平成29年度調査、調査区１）は、Ｓ44より17㍍西側の、本丸御殿跡の奥「御居間」建物付近で確認された（註15）。赤石を組んだ溝状遺構の両側壁部分が検出されており、幅約0.8㍍を測る。天井部の石材は、崩落して暗渠内に埋没しているためか、明瞭に確認されなかった。しかし、平成30年度調査時にＳ44の壁面で確認された同様の暗渠において、調査時に内部を覗いて確認した所、天井部の石材にも壁材と同じく赤石の割石を用いられていたため、Ｓ10の天井部にも

同じく赤石の割石が用いられていた可能性が高い。S10の調査は、側壁上部の検出にとどまったため、床面の標高値等は不明である。側壁の石材上面の標高値は2.28㍍、暗渠の堀込面の標高値は約2.6㍍であるため、暗渠の天井部における標高値は、おおよそ2.6㍍前後と想定される。S10の平面形状は、暗渠の崩落時に造成土が暗渠内に落ち込んだ跡と見られる溝状の痕跡が遺構検出面にて確認できており、展開を推察できる。それによると、暗渠東側は「長局」建物南側を通ってA地点へ続くとみられ、西側は「御居間」建物の下を通り北西方向へ延びると見られる。

C地点：**赤石積水路**（平成13年度調査）は、佐賀城本丸の南西部、本丸御殿跡の「内」（藩主の日常生活空間）の「御稽古場」建物南側で確認された（註16）。この水路には開渠部分と暗渠部分があり、開渠部分は幅0.8～1.0㍍、底面標高は約1.8㍍を測る。石積方法は、ノミで精加工した赤石を布積み（部分的に亀甲積み）している。水路の蓋石は存在せず、開渠と考えられる。開渠部の11㍍南東側では、延長部と見られる暗渠が検出されている。この暗渠は、幅0.8～1.0㍍、底面の標高値は約1.8㍍を測る。石積方法は開渠部と同様だが、石材は赤石の荒割材でノミによる精加工は見られない。上部には玄武岩系の蓋石が据えられており、暗渠と考えられる。

D地点：**石樋遺構**（平成12年度調査）は、佐賀城本丸跡の西側土塁石垣の北端より72㍍地点で、東西方向に延びて西側土塁石垣を貫通する状態で確認された（註16）。法量は、長さ16.7㍍、幅1.2㍍を測る。底面の標高値は、西側開口部から東側開口部４㍍手前までは1.92㍍、そこから本丸跡内部へ向けて勾配がかかり、東側開口部で1.72㍍を測る。樋管の内法は、幅0.75㍍、高さ0.45㍍を測り、石材はノミで精加工した切石を用いる。床材・側壁材・蓋材の接合部は、組合せのために細かな石材加工がされており、さらに樋管全体を粘性土で巻き込む等、止水処理を入念に施している。石樋遺構は、東側の開口部でC地点の開渠部と接続する。西側開口部には割石水路が続いているが、この割石水路の石材にはドリル痕が残っており、昭和期に付け加えられたものと思われる。

以上のA～C地点は、赤石の切り石を用いて布積み（部分的に亀甲積み）を行う構造的類似から、C地点と接続するD地点も含めて、一連の暗渠遺構と見られる（註17）。

この一連の暗渠遺構の性格については、まずA・B地点は、本丸建物の近くに設けられた水汲み遺構とそれに繋がる暗渠と考えられるため、飲用水を含めた生活用水を取得するための上水道と考えられる。

次に、C・D地点についてであるが、発掘調査を行った佐賀県教育委員会・佐賀県立佐賀城本丸歴史館の調査報告書にて、断定するには至らないとした上で「（D地点の）機能については、一部ながら本丸内に流入する勾配があること、堅牢な作りであること、止水性能が考慮されていることから、飲料水等の上水施設である可能性が高」いと述べ、C・D地点は「堀側から西側土塁石垣下を潜り本丸内へ引水するための水路である蓋然性が高」いとしている（註15・16）。このように、C・D地点の暗渠遺構は従来、流路は西側土塁の付近から取水されて佐賀城本丸内へ入り、東側へと配水される上水道と考えられていた。

しかし、C・D地点の暗渠遺構の性格と流路方向については、平成29・30年度に調査したA・B地点の調査成果を踏まえると、従来考えられていたものとは反対の性格と流路方向を持つ暗渠遺構である可能性が考えられる。

その理由としては、まず、A～D地点まで一連と見られる暗渠遺構の流路方向についてであるが、暗渠の標高値を比較すると、本丸南東側に位置するA地点：水場遺構S44の西壁暗渠の開口部における天井の標高値は2.79㍍、床面の標高値は2.0㍍程度と想定される。本丸南西側に位置するC地点：赤石積水路は、D地点との接続部における暗渠の天井標高値は2.37㍍、床面の標高値は約1.8㍍を測

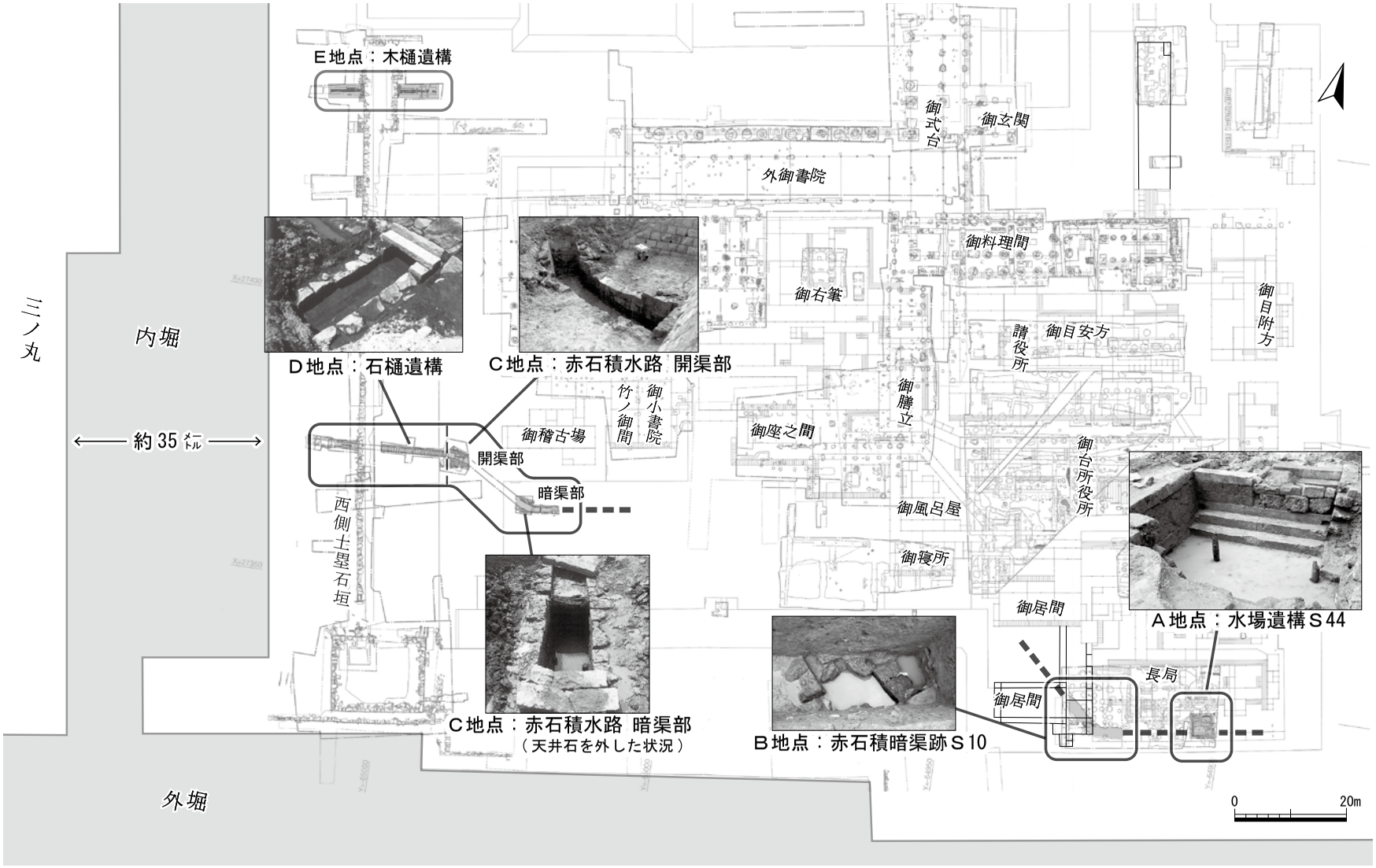


図４　佐賀城本丸跡 発掘調査位置図（S＝1/1000）

（図面は佐賀城本丸歴史館2021『佐賀城本丸跡』p. 141- 図104を転載して加筆・修正。写真は佐賀城本丸歴史館2021『佐賀城本丸跡』PL. 13-1（A地点）、PL. 9-2（B地点）、佐賀県教育庁文化課2005『佐賀城公園整備工事報告書』p. 34-pic 4-20（C地点開渠部）、p. 34-pic 4-21（C地点暗渠部）、p. 31-pic 4-12（D地点）より転載）

る。C地点と比べてA地点の天井標高は約40㌢、床面標高は約20㌢高いことから、この暗渠遺構は、A地点→B地点→C地点→D地点の順に、東から西へ流水していたと考えられる。

次に、C・D地点への引水方法については、D地点の西側開口部は、本丸と三ノ丸間の内堀に面している。この内堀の水は、多布施川の開渠を通って城内に引き込まれた上水ではなく、佐賀城の外堀と続いている飲用に適さない水であるため、この本丸と三ノ丸間の内堀の水を本丸内に上水として引き込むことは出来ないと考えられる。また、多布施川の開渠を流れる上水を、三ノ丸から内堀を越えて本丸のD地点へ引き込んでいた可能性については、D地点と内堀を挟んで対岸にある三ノ丸とは、約35㍍の距離が離れている。各時期の佐賀城を描いた複数の絵図を見ると、この場所に構築物は描かれておらず、この内堀を超えて多布施川の本流から本丸内へ上水を引いていたとは考えにくい。すなわち、上記の2点から、C・D地点は、本丸西側の内堀から本丸内へ上水を引き込んでいたのでは無く、反対に、本丸内で使用した水を西側土塁石垣の下を東から西へ通過させて、本丸西側の内堀へ排水する下水道であると考えられる。

以上のことから、現時点の発掘調査の成果から考えると、この暗渠遺構は、多布施川の本流から引き込まれた上水を本丸内に配水するための水道であり、流路はA地点のある本丸南東側から西へ流れ、B地点を経由して本丸内の各建物へ上水を配った後、本丸南西側のC地点へ到達すると思われる。そして、D地点を通って本丸西側の内堀へ排水していた可能性が考えられる。

この水道遺構の構築時期は、石材としての赤石の導入が江戸時代後期以降と考えられることから、天保期の本丸御殿の再建時に構築された可能性が高い（註15)。また、D地点は、上部の西側石垣の改修時期との関わりから江戸中期以降の時期が考えられるため（註16)、A～C地点の赤石を用いた遺構より古い可能性があり、上水道網が改修されている事も考えられる（註18)。

3　近世佐賀城の本丸・二ノ丸周辺の上水道経路の考察

佐賀城本丸・二ノ丸での上水道については、史料が少なく不明な点が多いため、発掘調査の成果を踏まえて検討を行いたい。

佐賀城の上水道の検討をする上で、重要な画期が3つ挙げられる。1つ目は、慶長7（1602）年～慶長16（1611）年にかけて行われた近世佐賀城の普請である。近世佐賀城は、龍造寺氏の居城である村中城を拡張・整備して築かれており、この時に成富兵庫茂安によって佐賀城・城下町の上水道が整備されている。2つ目は、享保11（1726）年の火災による、本丸と二ノ丸建物の焼失である。被災後、本丸建物は再建されることは無く、二ノ丸に藩政機能の中心が移された。3つ目は、天保6（1835）年の火災にて再び二ノ丸建物が焼失した後の、本丸建物の再建である。このとき上水道も再整備が行われたと考えられる。以上のように、近世佐賀城は2度の大火をきっかけに、城内の建物配置が大きく変化しており、それに伴って上水道の経路も変更されていると考えられる。そのため、これら3つの画期に従って、佐賀城本丸・二ノ丸における上水道の経路とその変遷について考察したい。

1期　慶長期～享保の火災前：初期の近世佐賀城

近世佐賀城が築城されてから享保の火災以前まで、多布施川で引かれた上水は、唯一外郭部と接続している土橋に配された暗渠から本丸・二ノ丸に引き込まれたと推察される。この時期の佐賀城本丸・二ノ丸の詳細な建物配置は不明であるが（註19)、各時期に描かれた佐賀城の絵図を比較すると、塁線や通路等は築城当初からおおよそ変わっていないため（註12)、この上水道が土橋を渡り本丸・二ノ丸へ入る経路は、1～3期を通して踏襲されると想定している。

本丸・二ノ丸の曲輪へ入った暗渠がその後に取った経路については、近世佐賀城の普請が完了した

写真12　佐賀城外郭部の多布施川水路（東から）
※左手は佐賀城内の通路跡、右手は太田鍋島家屋敷跡（慶長期段階）

写真13　佐賀城東御門跡（西から）

写真14　佐賀城外郭部と本丸・二ノ丸間の土橋跡（西から）

写真15　佐賀城鯱の門（大手門）と復元された本丸御殿（東から）

写真16　A地点 水場遺構S44 西壁暗渠開口部（東から）
（佐賀城本丸歴史館2021『佐賀城本丸跡』PL. 10-3を転載・修正）

写真17　A地点 水場遺構S44 西壁暗渠の内部（東から）
（佐賀城本丸歴史館2021『佐賀城本丸跡』PL. 11-3を転載）

写真18　C地点 赤石積水路開渠部（東から）

写真19　佐賀城本丸跡の西側土塁石垣と本丸と三ノ丸間の内堀跡（南から）

慶長16年には鍋島直茂・勝茂が本丸へ移っているため（註15）、上水道も藩主が居住する本丸御殿の方面へ最初に配されていたものと考えられる。そのため、上水道である暗渠の経路は、土橋を渡って本丸・二ノ丸の曲輪に入った後、二ノ丸西側の内桝形内で南へ折れて、現在の佐賀城鯱の門がある大手門周辺を通り、本丸内に配水していたものと考えられる。続いて、いずれかの地点で二ノ丸内にも暗渠で上水道を配し、最後は外堀へ排水したと考えられる（図５の１期）。

２期　享保の火災後～天保の火災前：二ノ丸御殿の再建期

享保11（1726）年の火災により、天守を含む本丸・二ノ丸・三ノ丸の建物が焼失した。佐賀藩は、享保13（1728）年に二ノ丸御殿を再建し、藩政の中心機能は二ノ丸へ移った。本丸では建物は再建されずにほぼ空き地になっており、軍事教練等に利用されていたと見られる（註20）。そのため、二ノ丸建物の再建時に上水道の経路も改修され、本丸を経由するのではなく、外郭部と繋がる土橋を通過した暗渠をそのまま東進させ、真っすぐ二ノ丸へ引き込む経路に改修されたのではないかと考えられる（図５の２期）。そして、続いて本丸内へも暗渠を配した可能性があるが、最後には佐賀城の外堀へ排水したと考えられる（註21・22）。

３期　天保の火災後：本丸御殿の再建期

天保６（1835）年の火災により、藩政を執り行っていた二ノ丸御殿が再び焼失した。その後、第10代藩主鍋島直正により本丸御殿が再建され、再び藩政の中心となった。本丸御殿の再建は、資金難に見舞われ、途中工事の中断もありながら、当初の計画よりも経費を抑えて建設が進められたと考えられる（註15）。この本丸御殿の再建時に、上水道も再整備されたと考えられるが、整備費用を抑えるためにも、上水道は従来の経路を可能な限り利用し、二ノ丸から本丸御殿へ引き込むルートを想定している。多布施川の本流から上水を引き込んだ暗渠は、まず二ノ丸内で南へ折れて、本丸の北東部に入り、現在の佐賀大学付属小学校の敷地の西端を通って南下し、まず本丸御殿奥の空間に配されると考えられる。そして、上水道は、本丸御殿奥の「長局」建物の南側で西へ曲がってＡ地点に至り、奥御殿内で使用するための上水が汲取られる。Ａ地点を通過した暗渠は、「長局」建物に並行して西へ流れ、やや角度を北へ曲げてＢ地点に至る。暗渠は、Ｂ地点を通過してさらに北西方向に流れて、本丸御殿奥の「御居間」「御寝所」「御風呂屋」等の建物付近を通ると見られる。そして、暗渠の経路は、いずれかの地点にて西へ折れて、本丸南部にあった庭池（御泉水と呼ばれる）よりも北側を東から西へ本丸内を流れ、本丸御殿の内（藩主の生活空間）にある「御小書院」等の建物付近を通ると見られる。これらの本丸御殿の付近を流れる途中で、上水道である暗渠には取水口が設けられ、本丸御殿内で上水が利用されていたものと考えられる。暗渠は、本丸御殿内に上水を配った後、「御稽古場」の南側でＣ地点の暗渠部に至る。そして、さらに北西へ進んでＣ地点の開渠部、続いてＤ地点へ流れ、西側土塁の下を抜けて本丸と三ノ丸間の佐賀城内堀へ排水されたと考えられる（図５の３期）。この流路は、本丸内の下水の排水に加えて、佐賀城外堀へ水を供給する役割も持っていたであろう。

おわりに

今回は、多布施川から佐賀城へ至る上水道の経路を改めて確認した。その水路は、現在では多くがコンクリート等で改修されてはいるものの、位置や基本構造は近世から変わっておらず、近世初頭に成富兵庫茂安が手掛けた土木工事によって現在まで続く佐賀の街の基礎が作られたことが実感できた。

また、佐賀城本丸・二ノ丸内での上水道の経路については、不明な点が多く、今回検証を行った。発掘調査の成果を踏まえた上で、上水道経路が近世佐賀城の普請・焼失・再建という建物配置の変化に従って変遷していることを想定したが、この経路には史料や発掘調査で確認されておらず、可能性

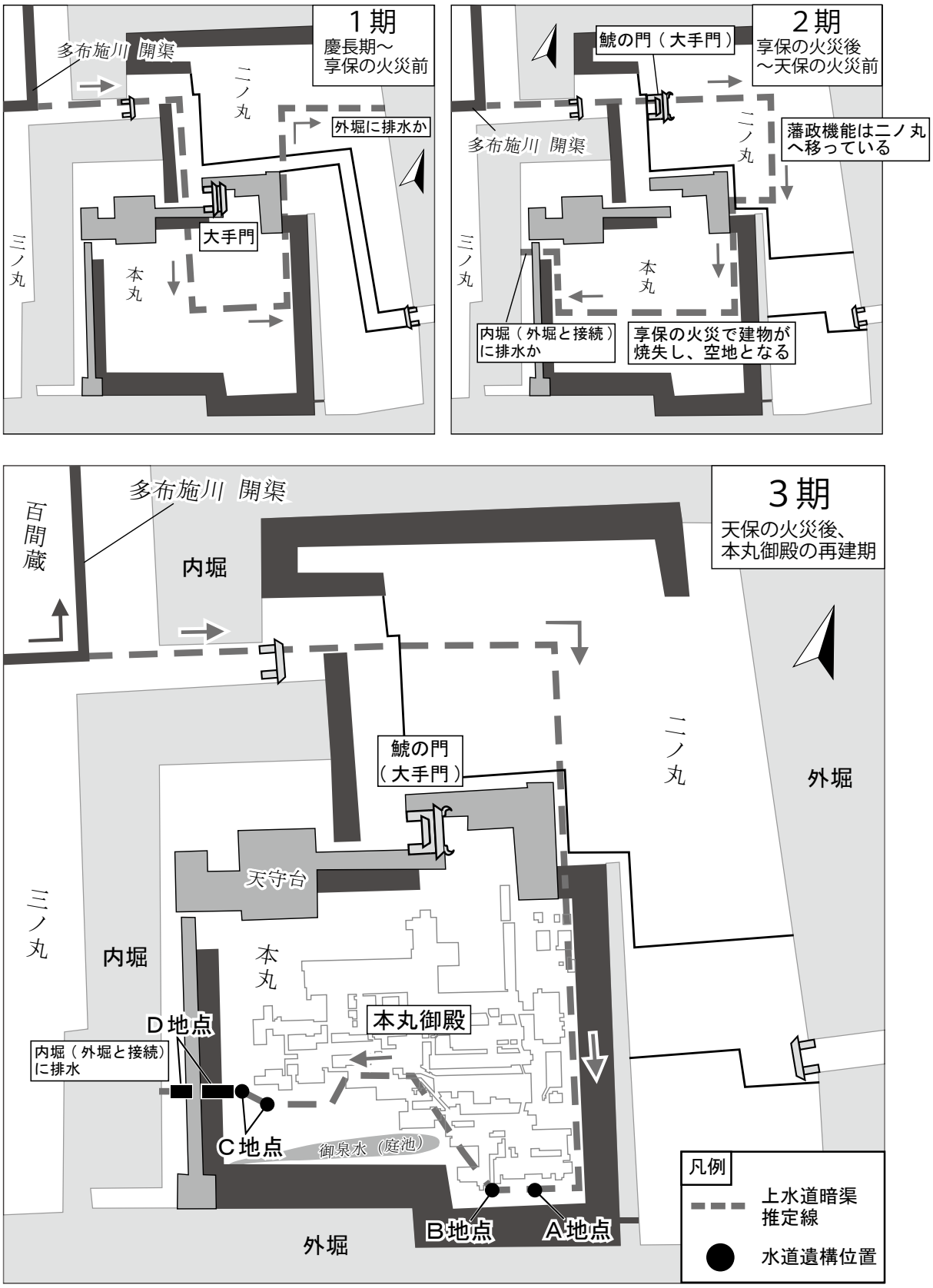


図５　佐賀城上水道経路 想定図（１～３期）

（図面は鍋島報效会2009『御城下絵図に見る佐賀のまち』に掲載の「御城分間絵図」p. 28-29、「正保御城下絵図」p. 10-11（両図とも（公財）鍋島報效会所蔵）を参考に作成）

にとどまる点が含まれている。今回考察した上水道経路の正否が、今後の発掘調査成果により検証できることを期待している。

【謝辞】

本稿の執筆にあたっては、大坪芳典氏には構想の段階から多くのご教示をいただきました。また、古門雅高氏には本稿の構成について丁寧な指導を賜りました。加えて、発掘調査や執筆にあたっては、上野淳也、塩見恭平、渋谷格、清水宗昭、下村智、田中祐介、長崎浩諸氏にご教示、ご協力を賜りました。末筆ながら、感謝申し上げます。

【註】

註 1 成富兵庫茂安（1560～1634）は、現在の佐賀市鍋島町に生まれ、龍造寺隆信・政家、鍋島直茂・勝茂に仕えた武将である。茂安は、元和元（1610）年頃から佐賀平野において多くの治水工事を手掛けたことで有名である。その代表的なものとしては、多布施川に設けられた石井樋の他、千栗（ちりく）土居（みやき町）、蛤水道（吉野ヶ里町）、永池堤（北方町）等がある。茂安の残した功績は現在でも知られており、旧三養基郡北茂安町の町名は茂安の名前にちなんだもの（2005年に合併され、現在はみやき町に変更された）である。また、みやき町白石神社では、土木治水の神様として祀られている他、佐賀平野の各地に功績碑等が残されている。

註 2 福岡博 1995「水を中心にした国づくり、治水の神様成富兵庫茂安」『江戸時代 人づくり風土記 ㊶ふるさとの人と知恵 佐賀』社団法人農山漁村文化協会　pp. 38-45

註 3 南部長恒 1834『疏導要書』pp. 28

註 4 宮本雅明 1991「第 2 章　城下町佐賀の形成」『城下町佐賀の環境遺産 Ⅰ 佐賀市歴史的建造物等保存対策調査報告』佐賀市教育委員会 pp. 23

註 5 上水道として論じられたものではないが、多布施川が近世佐賀城の中に引き込まれている事実は近年広く知られており、佐賀市の広報文書やテレビ番組のなかで、多布施川が城内に引かれたものであると紹介されている。

註 6 『疏導要書』によると、築かれた当初の大井手堰は、川の中に乱杭を打って土俵を入れる構造であった。洪水時には、この堰を崩すことで、砂や石を多量に含んだ水を上水道である多布施川へ流下させない仕組みになっていた。

註 7 野越を越えた先には二の井手堰があり、ここから農業用水路へも水が送られた。

註 8 江口辰五郎 1977『佐賀平野の水と土－成富兵庫の水利事業』新評社

註 9 上水道である多布施川は、近世に新規に開削されたものではなく、嘉瀬川の退化した旧河道を改修したものである。嘉瀬川と多布施川が現在の流路を取るようになった時期について、詳細は不明だが、『疏導要書』によると、元亀 2（1571）年には嘉瀬川の分流として存在しており、石井樋の前身といえる「井村井関」が存在して、井樋番が常置されていたとある（九州農政局嘉瀬川水利事業所1991）。

註10 佐賀市史編さん委員会 1978『佐賀市史』第 3 巻 近代編明治期

註11 藩政時代の法令史料には、浚渫作業の指示がしばしば確認される。宝暦12（1762）年の『触状写』には、「一諸小路屋敷裏水流悪敷、用水難相成候、間ニハ井手を揚関留候所も有之由相聞候、右之通二而者不宜候条、石井樋関留内、銘銘屋敷限堀浚有之候様可被相達候、尤浚相調候哉否、目付差廻見分申付義候条、急度相調候様御存之筋筋懇可被相達候、以上」の記載があり、水の流れが悪く水利に影響が出ている箇所があるため、石井樋を堰き止めている間に浚渫作業を行い、水路の状態を整えるようにとの指示が行われていた。このように、関係各所が協力して、上水道の維持管理に努められていた。

註12 公益財団法人鍋島報效会 2009『御城下絵図に見る佐賀のまち』

註13 佐賀県教育委員会 2013『佐賀県の中近世城館－第 2 集　各説編 1（三養基・神埼・佐賀地区）－』佐賀県文化財調査報告書第201集 佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ

註14 佐賀平野は、嘉瀬川や筑後川等の河川運動により形成された沖積平野で、概ね北から南へ傾斜しているため、佐賀平野を流れる河川の自然流路は北から南方向へ流れている。多布施川の水路は城内に上水を配るために、自然地形に逆らって北上するように水路にわずかな傾斜をつける高い土木技術が用いられている。

註15 佐賀県立佐賀城本丸歴史館 2021『佐賀城本丸跡－明治維新150年「肥前」顕彰事業に伴う埋蔵文化財調査報告

書－』

註16 佐賀県教育庁文化課 2005『佐賀城公園整備工事報告書－県史跡「佐賀城跡」本丸土塁石垣に関する調査・復元工事報告－」佐賀県文化財調査報告書第161集

註17 平成30年度調査では、この暗渠遺構の経路を確認するために調査区７（佐賀城本丸跡奥の庭園部）において、本丸御殿跡の園池と「御寝所」建物間の空閑地と考えられる箇所に拡張トレンチを設けて調査を行ったが、暗渠遺構の痕跡は確認できなかった。このため、一連の暗渠遺構の流路は、より北側の本丸建物の近辺を通っていた可能性が高い。

註18 天保年間の本丸御殿再建期より以前の上水道の可能性がある遺構として、本丸西側石垣の下を通る木樋（図４のＥ地点）が確認されている。この木樋は現存する石垣に先行して造られたと考えられ、精巧な作りから上水道の可能性が想定されている（佐賀県教育庁文化課2005）。

註19 初期の近世佐賀城の建物の様子が分かる資料としては、慶長年間の佐賀城を描いたと見られる「佐嘉小城内絵図」に、本丸御殿と二ノ丸建物がデフォルメされた姿で描かれている。また、平成11・30年度に行われた佐賀城本丸跡の発掘調査にて、当該時期のものと考えられる建物礎石が確認されている。

註20 浦川和也 1995「佐賀城跡の歴史的景観とその変遷」『研究紀要』佐賀県立名護屋城博物館

註21 この時期には、佐賀城内各所の土塁や石垣が崩落し、修復が行われているが、上水道の水路も同様に修復が行われているようである。『泰國院様御年譜地取』の寛政10（1798）年８月９日の条には、「…御本丸・二御丸御郭御用水無之、甚御無用心之儀御座候、且は御部屋を初諸役所迄之用水、是迄三御丸御門前より汲運候儀、甚不便利之儀御座候、…外繁脇本川筋より井樋仕部南堀裏江通、夫より大供屋敷裏空地三間之所壱間通東江堀通、二御丸表御門前御土居下堀抜候而井樋仕部、同所御土居際江壱間に弐間之形仕、水溜之内は四方石搦にして、東南北三方江は石段相付汲地と成し、上は屋根葺にして家台仕候儀、…」と記載があり、本丸・二ノ丸への用水が無く、また各部署への用水は、三ノ丸手前より汲んで運んでいるため不便であること、そのために新たに上水道と見られる用水路（開渠および暗渠）が設けられ、二ノ丸付近には階段を設けた取水施設を設ける計画がなされたことが分かる。加えて、この史料に登場する取水施設の特徴（暗渠網の途中に石積で設けて、階段を設置して降りて水を汲めるようにし、上部には覆屋を付ける）は、本丸南東部の水場遺構Ｓ44と共通しており、佐賀城内で上水を汲み取るために同様の施設が複数設けられた可能性がある。

註22 寛政８（1796）年に城堀護岸修復のために作成された「御城分間御絵図」は、佐賀城全体が正確な縮尺で描かれた絵図で、享保の火災後、再建された二ノ丸御殿で藩政を執り行っていた時期の佐賀城を描いたと考えられる。この絵図の本丸・二ノ丸と外郭部をつなぐ土橋付近の多布施川水路の法面に、四角い構築物が描かれている。注記が無いため詳細は不明だが、『泰國院様御年譜地取』には「三御丸御門前より汲運」んでいると記載があるため、階段等の水汲みのための施設を描いている可能性がある。または、本丸・二ノ丸へ延びる暗渠の開口部を描いている可能性も考えられる。

【引用・参考文献】

尾澤卓思 2006「成富兵庫の土木技術と石井樋の復元」『葉隠研究』第58号 葉隠研究会

九州農政局嘉瀬川農業水利事業所 1991「嘉瀬川農業水利史」『佐賀平野土木史　水利・干拓史編』江口辰五郎著・宮地米蔵監修

佐賀県教育委員会 2002『佐賀県内遺跡確認調査報告書20』佐賀県文化財調査報告書第151集

佐賀県教育委員会 2013『佐賀県の中近世城館－第２集　各説編１（三養基・神埼・佐賀地区）－』佐賀県文化財調査報告書第201集　佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ

佐賀市教育委員会 1996『佐賀城本丸跡埋蔵文化財確認調査報告書』佐賀市文化財調査報告書 第76集

佐賀市教育委員会 2006『石井樋』佐賀市埋蔵文化財調査報告書 第５集

佐賀市教育委員会 2007『佐賀城跡－２・３区の調査－』佐賀市埋蔵文化財調査報告書 第18集

佐賀市教育委員会 2010『佐賀城跡－４・５区の調査－』佐賀市埋蔵文化財調査報告書 第56集

佐賀市史編さん委員会 1977『佐賀市史』第２巻 近世編

田中耕作 2008『佐賀藩の初期を支えた男 成富兵庫茂安－戦場に、外交に、そして治水に－』佐賀新聞社

福岡博 1974『佐賀豆百科　３』金華堂

大和町史編さん委員会 1975『大和町史』大和町教育委員会

宝暦12年２月「触状写」『鍋島家文庫』請求番号［鍋326-41］（公益財団法人鍋島報效会 2014『佐賀城下法令史料集』pp. 133-134）

寛政10年８月９日「泰國院様御年譜地取」『鍋島家文庫』請求番号［鍋113- 補28］（佐賀県立図書館 2001『佐賀県近世史料』第一編第九巻　pp. 317）

【引用・参考ウェブサイト】

国土交通省国土地理院《地理院地図『電子国土 Web』》https://maps.gsi.go.jp/（2024年10月23日アクセス）
佐賀市《佐賀市歴史探訪》https://www.city.saga.lg.jp/main/3859.html（2024年10月23日アクセス）
徴古館《佐賀城下あれこれ》https://www.nabeshima.or.jp/main.php/5086.html（2024年10月23日アクセス）